平成２１年度　8020 公募研究報告書抄録

研究課題：加齢による歯と口腔機能の変化と QOL との関係 -5 年間の追跡調査-
研究者名：池邉一典，榎木香織，枦山智博，松田謙一，吉田 実，前田芳信
所　　属：大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座

目的

高齢者においては，加齢とともに歯数が減少し，口腔機能が低下することが多い．しかし，この歯や口腔機能の加齢変化が，QOLに及ぼす影響については，エビデンスはほとんどみあたらない．

本研究においては，５年前に歯科検診と口腔機能検査，ならびに口腔関連QOLの評価を行った高齢者を対象に，追跡調査を行う．その結果から，歯と口腔機能の加齢変化がQOLに及ぼす影響について，縦断的に分析を行った．

研究方法

被験者は，2004年に歯や義歯の状態と咬合力，咀嚼能力などを測定し，データが保管されている大阪府老人大学講座の元受講生108名(男性58名，女性50名，平均年齢71.1 ± 4.3歳)とした．被験者は自立的な生活を送っている比較的健康な高齢者である．本研究は大阪大学大学院歯学研究科の倫理審査委員会の承認を得て行った．

調査項目は，1)歯の残存状態，2) デンタルプレスケール(富士写真フィルム社)を用いた咬合力検査，3)検査用グミゼリーを用いた咀嚼能率検査，4)短縮型日本語版 Oral Health Impact Profile (OHIP-14)による口腔関連 QOL とした．統計学的分析については，OHIP-14 スコアと各変数との相関を，Spearman の順位相関係数の検定を用いて検討した．また，各変数の変化については，Wilcoxon 符号付順位和検定を用いて検討した．

結果

5 年間に歯を喪失した人は 42 名(39％)であり，残存歯数は平均 25.1(SD:5.7)から 24.3(6.1)に減少した．歯の喪失を認めた人の中での一人平均喪失歯数は 1.98(1.18)であった．健康の自己評価は，5 年間で有意に低下した(P=0.005).

OHIP-14 スコアについては，2004 年と 2009 年とのスコアとの間には有意な相関がみられた(rs=0.574, P<0.001)．　OHIP-14 スコアは，5 年間に平均 10.1(7.4)から 12.3(7.5)に有意に増加し，口腔関連 QOL が低下したことが示唆された (p=0.002).

残存歯数と OHIP-14 スコアとの関係については，2004 年，2009 年とも，両者に有意な負の相関がみられ(それぞれ，2004 年，rs=-0.229, P=0.19；2009 年，rs=-0.296，P=0.002)，残存歯数の少ないものは，QOL が低いことが示唆された．一方，残存歯数の変化と OHIP-14 スコアの変化との間には，有意な関連はみられなかった．

咬合力については，2004 年と 2009 年との間で有意な相関がみられた(rs=0.366, P<0.001)．咀嚼能率についても，2004 年と 2009 年との間で有意な相関がみられた(rs=0.559, P<0.001)．しかし，2004 年と 2009 年の間で，咬合力と咀嚼能率はいずれも有意な差はみられなかった．

まとめ.

本研究の結果より，自立的な生活を送っている比較的健康な平均年齢 71 歳の高齢者において，過去 5 年間で約 40%の人が歯を失い，口腔関連 QOL が低下することが明らかとなったが，残存歯数や口腔機能の低下と QOL の低下との有意な関連は示されなかった．今後被験者数を増やし，研究を進める予定である．